

2016年日本チリ学術フォーラム報告

TPPセッション（11月3日、サンティアゴ）、Global Historyセッション（11月4日、サンティアゴ）、アジア研究・ラテンアメリカ研究セッション（11月8日、プエルトナターレス）

東京大学とチリ・カトリカ大学及びチリ国立大学との学術交流である日本チリ学術フォーラムに、東洋文化研究所は総合文化研究科と共同で参加しました。上記3大学は学内以外にも他大学に参加を呼びかけることとし、私たち文系チームも東洋大学・京都大学・長崎大学からの参加者があり、また、学内においても人文社会系研究科から参加者がいました。

以下のセッションの記録は総合文化研究科博士課程の松尾・三浦両氏によるものですが、この報告にまとめるにあたっての文責は高見澤にあります。おふたりには、現地での案内や通訳など助けていただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

A.参加者一覧

1. 総合文化研究科博士課程

(1) 松尾 俊輔 *

(2) 三浦 航太 *

2. 東洋文化研究所

(1) 高橋 昭雄 *

(2) 名和 克郎 *

(3) 高見澤 磨 *

3. 人文社会系研究科

(1) 島田 竜登

(2) 守川 知子

4. 東洋大学

(1) 楠元 純一郎（法学部） *

5. 京都大学

(1) 村上 衛（人文科学研究所）

6. 長崎大学

(1) 鈴木 英明（多文化社会学部）

以上10名。*のついている6名はサンチャゴ・セッションとパタゴニア・フォーラムとの双方への参加者。他の4名はサンチャゴ・セッションのみ。

B.活動日程

11月2日（水）打ち合わせ（Crown Palaza Hotel）。

11月3日（木）TPPセッション（サンティアゴ、チリ・カトリカ大学）。

11月4日（金）Global Historyセッション（サンティアゴ、チリ・カトリカ大学）。

11月5日（土）東京大学チリ同窓会参加。

11月6日（日）サンティアゴからプンタ・アレーナスに移動。

11月7日（月）マガジャネス大学にてオープニングセレモニー。その後、プエルト・ナターレスに移動。

11月8日（火）アジア研究・ラテンアメリカ研究セッション（プエルトナターレス、マガジャネス大学）

11月9日（水）パタゴニア見学

11月10日（木）プンタ・アレーナスを經由してサンチャゴに戻る。

C.各セッションの概略（敬称等略）

1. 11月3日TPPセッション

11月3日チリ・カトリカ大学Casa Centralキャンパスにおいて、TPPに関するセッションを行った。会場にはチリ・カトリカ大学の学生、教員約50名が集まった。まずチリ・カトリカ大学 Marcos Jaramilloから歓迎のあいさつ、プレゼンター3名の紹介、TPPの現状と将来予測についての簡単な説明がなされた。最初のプレゼンターとして、チリ政府TPP顧問のPablo Romeroが、チリを取り巻く国際貿易状況、チリの貿易政策、TPPの中のチリの位置づけ、経済活動への市民参加に関してプレゼンテーションを行った。次に高見澤磨より、日本と中国の貿易自由化の歴史、日中貿易史の比較に関してプレゼンテーションがなされた。最後に、高橋昭雄が、TPPに直面する

日本及びASEANの農業、TPPに関する賛成・反対の議論、ASEANの貿易自由化の概要・障害、日本やASEAN諸国における稲作の文化性についてプレゼンテーションを行った。

2, 11月4日グローバルヒストリーセッション

11月4日チリ・カトリカ大学San Joaquinキャンパスにて、ワークショップ"Global History in Japan and Chile"が行われた。まず同大学Sol Serrano副学長より今回のワークショップの位置づけやグローバルヒストリーに関する見解が述べられた。ラテンアメリカや日本におけるグローバルヒストリーをテーマとした前半のセッションでは、Javier Puente (チリ・カトリカ大学) が気候変動が各国の政治経済にもたらす影響について、Alessandro Santoni (サンティアゴ大学) がチリ軍政下での右派勢力について、松尾俊輔 (東大博士課程) がグローバルな視点からのウルグアイにおけるスポーツ史について、鈴木英明 (長崎大学) が日本におけるグローバルヒストリー研究の概要について発表を行なった。グローバルヒストリーにむけた転換というテーマで行われた後半のセッションでは、Joaquin Fernandois (チリ・カトリカ大学) が一国史とグローバルヒストリーの関係について、村上衛 (京都大学) がグローバルヒストリーとしての中国貿易史について、鈴木英明がグローバルヒストリーとしての奴隷廃止について発表を行った。質疑応答では、グローバルヒストリーの意義や、新しい研究視点、大学における歴史学の教育状況などについて活発に議論が交わされた。

3, 2016年11月8日 アジア研究・ラテンアメリカ研究セッション (パタゴニアフォーラムのWorkshop 10として)

11月8日にプエルト・ナターレスのマガジャネス大学プエルト・ナターレス・センター (Centro Puerto Natales, Universidad de Magallanes, Puerto Natales) において開催された。

(1) Session 1: Study Areas in Japan, Brazil and Chile

Ricardo Terra, University of Sao Paulo, "Asian and Latin American Studies at the University of Sao Paulo"

本発表は、大きく二部構成となっていた。前半では、1960年代にサンパウロ大学とチリをはじめとするその他のラテンアメリカの大学との間でいかなる学術的交流があったかを、従属論の展開を特に取り上げて論じた。後半では、サンパウロ大学及びサンパウロにおける日本文化の位置づけについて紹介した。サンパウロ大学での日本研究の状況に加え、日本出身のブラジル人アーティストのトミエ・オオタケ、日系文学サークルであるBrasil Nikkei Bungakuなどが言及された。

Kota Miura, The University of Tokyo, "LAINAC: A New "Collaborative" Project Between UTokyo and Universities in Latin America"

本発表の前半部では、東京大学におけるラテンアメリカ研究の状況を紹介し、第二外国語としてスペイン語が最も履修者が多いにも関わらず、そこから中南米研究に進む学生は非常に少ないことなどが指摘された。後半部では、ラテンアメリカ研究の発展を目指す新たな試みとして、2014年に発足したLAINACというプロジェクトを紹介した。ラテンアメリカ及びスペインの諸大学とのネットワークを形成し、教育と研究の双方で国際的な協力体制を築くというのがその主旨である。

Johannes Rehner, Universidad Católica de Chile, "Research at the Center for Asian Studies UC and Perspectives for Collaborative Work"

本発表の主眼は、チリカトリカ大学のアジア研究センターの紹介であった。"interdisciplinary"かつ"intercultural"であることをモットーとする同センターでは、政治学、経済学、地理学、歴史学、法学、芸術学の研究者が集い、目下5つのプロジェクトを複数の研究者の協力の下行うことで研究を進めている。フロアからは、地域研究の根幹である言語が極めて軽視されていることなどが問題点として指摘された。

(2) Session 2: Intercultural Dialogues

Pedro Iacobelli, Universidad Católica de Chile, "Transpacific Studies and Latin American Historical Writing"

昨今TPPなど主に経済協力の文脈で「環太平洋」という枠組みが殊に注目されている中で、ラテンアメリカの歴史学では未だ「環大西洋」が圧倒的に支配的なナラティブであり続けている。本

発表では、「環太平洋圏」が歴史学の視角としてどこまで有効かについて、マニラのカレオン船やドン・ロドリゴなどの例を挙げながら試論的に検証を行った。

Wonjung Min, Universidad Católica de Chile "Cultural Exchange in Northeast Asia, Korean Wave"
本発表では、1990年代後半以降のK-POPやドラマを中心とするいわゆる「Korean Wave」の受容について、政治、外交、文化という見地から論じた。東アジアにおける近年のナショナリズム言説は、しばしばポピュラーカルチャーを外交的価値を求める上での新たなアプローチとして強調してきたが、文化的統合は経済統合よりもはるかに困難なプロセスである。ラテンアメリカにおける韓国ポピュラーカルチャーの受容に関しては、ミン氏は「K-POPが国のイメージを向上させる」という通説には懐疑的であり、ファンダムと学術的文化的な関心とが乖離していることを指摘した。

Oscar Barrientos, Universidad de Magallanes, "Mundus alter et idem de Hall y el extremo austral irredento" ("Mundus alter et idem of Hall and the Godforsaken Southern Extreme")
本発表は、17世紀初頭のイギリス人司祭ジョセフ・ホールが書いたとされる小説『Mundus alter et idem (別世界かつ同世界)』の内容を紹介するものであった。「知られざる南方大陸」を旅する主人公がその土地の様々な習俗を記録したものであるという体裁のこの作品は、トマス・モアの『ユートピア』やラブレアの『ガルガンチュア物語』などの系譜に連なる風刺小説であるが、その知名度は非常に低い。本発表では、当時のヨーロッパにおける「悪徳」が全て「美德」として称えられるような倒錯した世界を描くことでパタゴニアという世界の果ての地に投影されていた、想像力のあり方を論じた。

(3) Session 3: Politics and Diplomacy

Marcos Jaramillo, Universidad Católica de Chile "Property and Its Relationship with Real Natural Law and Confucianism"
本発表では、西洋法と東洋法との接点として、西洋の自然法思想と中国の儒学思想との間の共通項を指摘した。

Lorena Oyarzún, Universidad de Chile, "Pacific Alliance and the Construction of a New Economic Regime? Lights and Shadows of the Renewal of Open Regionalism"
本発表は、チリ、コロンビア、メキシコ、ペルーが参加する経済統合のための組織である太平洋同盟(Alianza del Pacífico)について扱った。ラテンアメリカ経済統合の単位としては、メルコスールのライバルとも言える太平洋同盟の意義について、ラテンアメリカ諸国間でのパワーバランスの変化などの文脈に言及しながら、「開かれた地域主義(Open Regionalism)」への回帰であるとして論じた。

Nawa Katsuo, The University of Tokyo, "Effects of Translation on the Invisible Power Wielded by Language in the Legal Sphere: the case of Nepal"
本発表では、ネパールの憲法で定められた「dharmaに関する権利」をめぐる言語上の問題を論じた。西洋の研究者らは、しばしば「dharma」という単語を「宗教(religion)」と翻訳し、「ネパール憲法では信教の自由が保障されていない」などと論じることがあるが、この「dharma」という語は決して西洋世界における「宗教」と同一のものではない。古くから使われてきたこの語は、あくまでもネパール法の文脈において理解されるべきものであり、その意味において翻訳という営みが常に不完全なものであることを実例を通して論じた。

Kusumoto Junichiro, Toyo University, "The Influence of Japanese Civil Code (Law of Obligations) Reform on the Japanese Commercial Code"
本発表では、日本の民法における債権法の改正と、商法との関係について論じた。

(4) Session 4: Economy and Commerce

Raimundo Soto, Universidad Católica de Chile, The Course of Natural Resources (From an Economist Viewpoint)
本発表は、アジアの産油国に代表される天然資源の豊富な国々が、なぜ経済成長が遅れ不安定な市場に依存することになるのかを、経済学の視点から検討した。その上で、こうした資源国政府の選択は、経済学のみでは説明できないとし、領域横断的な研究の必要性を主張した。

Johannes Rehner, Universidad Católica de Chile, "Japanese Investment in Chile and Its Local Impact"
本発表では、鉱山部門を中心としたチリ経済における日本からの投資とそのインパクトについて論じた。多くの日本の大企業が、銅などチリの鉱山部門への投資を行ってきたが、近年の新たな動向として、100%日本資本で運営されるカセロネス銅山の例などが紹介され、こうした動きがチリ人労働者の賃金などに副次的な影響を与えていることが言及された。

Takamizawa Osamu, The University of Tokyo, "Historical Review on Japanese Liberalization of Trade and Chinese Openness to the International Community"
本発表では、日本と中国の貿易自由化の歴史について、両国を比較しながら論じた。

以上。